シンポジウム／「口承文芸研究は都市伝説をどう扱うか」

「都市伝説」という憂鬱

重信　幸彦

はじめに　「都市伝説」という憂鬱

今、「都市伝説」という言葉は、コンビニエンス・ストアの棚にならぶ廉価な本の、扇情的なタイトルを構成する要素の一つとして消費されている。その状況にも歴史的経緯があることは、飯倉義之の報告が教えてくれた。そこに、この「都市伝説」という言葉が、現代において担わされた役割がある、と考えなければいけないのかもしれない。

しかし、四半世紀前にこの言葉を、一つの学の視点を支え得る概念として日本の民俗学と口承文芸学に接合しようとした者の一人として、学の用語であったはずのものが、そんな事情は一切お構いなしに学の外側で使いまわされた挙句に、再びこうして学の場で問うことになる、この再帰的状況に、正直に言って憂鬱にならざるをえない。

今、私自身は、この「都市伝説」という言葉自体は、学術用語としては既に不要になっている、と考えている。おそらく学会機関誌『口承文芸研究』の「論文」というカテゴリーに、学術用語として「都市伝説」をタイトルに掲げた論考は、掲載されていない。それは日本民俗学会の『日本民俗学』でも事情は変わらない。

そして実は私自身も、「都市伝説」をメインタイトルに掲げた論文を書いていない。Jan Harold Brunvand（ブルンヴァン）の *Vanishing Hitchhiker*（1981）を共訳した際に、後で触れるように、私は訳者の一人として『日本民俗学』一八〇号に「「世間話」再考」を寄せ、既存の「世間話」というコンセプトを再解釈しつつ、そこに問いとしての「都市伝説」を重ねあわせて位置づけたので、「都市伝説」という用語をことさらに使う必要を認めなかったからでもある［重信　一九八九b］。

しかし、そうした軌跡があまり受け止められてこなかったことも事実であり、企画者から私に与えられた課題は、その「都市伝説」をめぐる初発の問いに再度向き合え、ということにある。今さら四半世紀も前の議論をむしかえすことに、大きなためらいもあるが、そもそもUrban Legend＝「都市伝説」という訳語を、どのような意図で提示しようとしたのか、それを明らかにしておこうと思う。

回想するブルンヴァン

アメリカの民俗学のなかでも、この「都市伝説」は、学術用語として定着し使われているわけではない。むしろ、ハロルド・ブルンヴァンの十八番の旗印として扱われているといったほうがいいだろう。アメリカの民俗学における専門用語としては、

むしろ contemporary legend が使われている。[1]

ブルンヴァンは既に教職を引退しているが、彼は自身のホームページで、自らが「都市伝説」研究を始めた経緯などを回想している。

それによると、一九五〇年代初頭に、urban belief tales という名称で、彼自身がセミナーで議論をしていたという。そして一九六一年に彼が大学の教員になって民俗学のコースを担当するようになり、フォークロアとは古色蒼然としたものではなく、若い学生達自身もフォークロアの保持者であることをわかってもらうための教材として、urban belief tales を取り上げはじめることになる。そしてそれは彼の民俗学の講義の定番のトピックのひとつになっていった。

その後二〇年たって、事例も集まったところで講義ノートを拡充して、*Psychology Today* 誌に論文を発表する［Brunvand 1980］。同誌は学術雑誌というより心理学を中心に、健康や人間関係について啓蒙することを目的とした一般読者向けの雑誌である。

ブルンヴァンによると、この論文がきっかけとなり、こうした話題がラジオやテレビのトークショウで取り上げられるようになったという。David Letterman というコメディアンによる人気ショー番組、Late Night with David Letterman に、ブルンヴァン自身が出演することにもなった。

そして、一九八一年 W.W.Norton から *Vanishing Hitchhiker* が出版される運びとなる。そこからブルンヴァンの都市伝説本がシリーズのように出されていくのは周知のとおりであり、ブルンヴァンは、この *Vanishing Hitchhiker* を皮切りに、現在までに管見する限り十点の都市伝説関係の本を出版している。[2]

このブルンヴァン自身による説明に従うなら、「都市伝説」は、アメリカ民俗学のアカデミックな世界で場所を獲得していったというより、かなり早い段階から、ラジオやテレビなど、お話を消費していくマーケットに近い所にあったことがわかる。

アメリカの民俗学で、こうした近代的状況のなかで生成されるフォークロアを扱ったのはブルンヴァンだけではない。一九六〇年代から七〇年代にかけて、北米各地の民俗学研究誌に、こうした話に関する報告が少なからず掲載されていた。そして、一九六九年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校比較民俗神話学研究センターで行われたシンポジウムをもとにした、Wayland D Hand 編集の *American Folk Legend A Symposium* (1971) では、後にインディアナ大学の民俗学の主任教授になるリンダ・デクが、心理学者ユングの空飛ぶ円盤に関する研究などに言及し、belief legends in modern society すなわち、現代的な文脈で現出する legends の研究の可能性について論じている［Degh 1971］。そしてブルンヴァンも、同書で modern legends という概念を使い、ユタ大学に通う若いモルモン教徒たちのレポートをもとに、モルモン教に関わる超自然的フォークロアについて論じていた［Brunvand 1971］。

ブルンヴァンの功績は、こうした話題が、民俗学の研究対象であることを広く一般に認知させたことであろう。彼は自身のホームページで、質問コーナーを開設しており、そのなかで、「あなたは大学ではずっと「都市伝説」を教えてきたのか?」とい

う、おそらく一般読者からの質問に対し、次のように答えている。「いいえ、私は民俗学に関するさまざまな科目を担当してきました。文学や作文のコースも受け持ちました。私が都市伝説についての科目を担当したのは、実際にはたった一度の特別科目だけでした。私の専門領域はアメリカ民俗学です。多かれ少なかれ都市伝説は、私の趣味（hobby）でした」。民俗学者・ブルンヴァンにとっても、一人歩きして人口に膾炙してしまった「都市伝説」という自らの旗印は、少し厄介なのかもしれない。

アメリカの民俗学から

「趣味」という言い方はレトリックであるとしても、この「都市伝説」がブルンヴァンの十八番に付けられた言葉であることが、そこからもうかがえるだろう。

そもそも、私たちは、ブルンヴァンの仕事以前に、なぜアメリカの民俗学に関心を持ったのか。それは、単に海外の民俗学のほうが日本の民俗学より進んでいる、というような理由からではない。それぞれの国の民俗学は、同じ名称を持ち、同じ概念を使いながらも、その前提や方法、研究対象そしてそれぞれの民俗学の歴史的展開自体が、それが育まれたナショナルな歴史に否応無く規定されている。どちらが進んでいて、どちらが遅れているという発想は、実は、そうした学そのものに刻まれた歴史性を問う契機を奪うことになる。

アメリカの民俗学と日本の民俗学のありようを比べると、二つの民俗学が前提にしている歴史意識が大きく異なっていることがわかる。日本の民俗学では、時間的に過去にさかのぼれば、より純粋で真正な（authentic）民俗があるという信念を抱きやすいのに対して、アメリカの民俗学では、歴史を遡及して真正性を求めるという志向は希薄に見える。

極端な言い方をすると、北アメリカの大陸にもとから居た人びと以外は、全て外来者であると言ってもよく、歴史を遡ればその多くはヨーロッパ大陸やアフリカ大陸などに行き着いてしまうことになる。したがって、アメリカの民俗学では、むしろ現在進行形の時間のなかで生み出され続けるという歴史意識が前景化する。そうした考え方は、古くは、開拓者達の西漸運動の過程を、アメリカ史の揺籃ととらえる歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナーによる、「フロンティア学説」[ターナー　一九七三]から、一九三〇年代のニューディール政策のなかで、アメリカ独自の文化を捉え直すという目的をもち、当時の民俗学者が少なからず動員されたフェデラル・ライターズ・プロジェクト（FWP＝Federal Writers Project）にいたるまで通底しているのである。

そして、アメリカ民俗学における歴史主義的な立場を標榜したリチャード・M・ドーソンは、アメリカ史の進行の過程で生成されるフォークロアに大きな関心を寄せた。その歴史主義的な民俗学は、たとえば legend という枠組みで、植民時代の宗教的伝承から現代の若者の Druglore（麻薬をめぐるフォークロア）にいたるまでを集めた［Dorson 1971］や、近代的な製鉄

の町を舞台にしたフォークロア研究［Dorson 1981］を生み出した。それは、同じ歴史的立場を標榜した日本の歴史民俗学とは、全く異なった視点と対象を具体化していたのである。

そうしたアメリカの民俗学は、日本の民俗学に比べて、同時代への関心をより強く持っていた。繰り返すが、これはどちらが優れているかという問題ではなく、それぞれの学が背負わされたナショナルな歴史意識の問題に他ならない。ただ、私たちにとって、こうしたアメリカの民俗学のあり方は、過去へと遡れば、より純粋な「民俗」がありうることを前提にしがちな日本の民俗学のあり方を、相対化する鏡にはなるだろうというもくろみがあった。そして、タクシーに乗った乗客がシートを濡らして消えてしまった、という日本で誰もが知っている話と、ほぼ同じ話がヒッチハイカーをめぐる話としてアメリカでも語られ、それを同時代のフォークロアとして正面から扱おうとしている民俗学のあり方を、私たちの足元に接合しようとしたのである。

〈仕組みとしての都市〉へ

しかし、ブルンヴァン自身は、urbanという語には、それほど大きな意味を与えてはいない。彼が最初にurban Legendを掲げたと考えられる［Brunvand 1980］では、「このような場合に、民俗学者が使うurban（＝都市）は、modern（＝現代）を意味しており、city（＝都会）と、特に関係があるわけではない」とし、あくまでも同時代を指示する言葉だとしている。それは、*Vanishing Hitchhiker*（1981）でも、ほぼ変わらない。

このブルンヴァンが使ったurban legendをそのまま「都市伝説」と翻訳し、おそらくブルンヴァン以上に、ことさらurbanという言葉にこだわりながら、日本における学の概念に仕立て上げようとしたのは、四半世紀前の私たち訳者の責任であった。

当時、日本の民俗学では、「都市」というフィールドが拓かれつつあり、その新たな領野における試行錯誤のなかで、それまでの民俗学のあり方自体を問い直す兆しが出始めていたのである。

その一方で、私が一九八四年に大学院に入った際、民俗学における都市研究を果敢にすすめていた一人の先輩から、卒業研究の際に教官の一人から「私の目の黒いうちは都市の研究なんて認めない」と言われたという話を聞いて、驚愕したことも事実であった。

それは単に「都市」という問いを民俗学から排除するというのではなく、大学の専門科目としての民俗学に体系があり、それを学ぶ順序があるという意味として受け止めるべき言葉であっただろう。しかしやはり、民俗学という体系から「都市」が周縁化されていたことは確かであり、古くへ遡ればそこに真正な（authentic）「民俗」があるという、日本の民俗学を規定する神話といっていいひとつの信念が横たわっているように思えた。

そしてそれが無前提に「基層文化」というような言葉と癒着し、我々の関心が縛られること自体、少なくとも私には、息苦しかったのである。[3]

一九八〇年代の「都市」という問いのなかには、そうしたそれまでの民俗学のありかたそのものを、問い質す射程があったはずなのである。

そしてブルンヴァンの著書の翻訳が企てられ、urban legendのurban＝都市という言葉に、ことさらに大きな意味が付与されることになった。modernやcontemporaryというコンセプトにより、相対的な時間の区分を可視化することができる一方で、もっと具体的な指示対象を喚起する「都市」のほうが、議論が拡散しないという思いもあった。その「都市」は、もちろん空間的な実態としての手触りを持つ都市（city）を含みながらも、むしろ近代化の過程で、私たちの日常を取り込んでいった〈仕組みとしての都市〉を射程におさめようとしていた。

この〈仕組みとしての都市〉は、一九八〇年代の民俗学のなかで、にわかに問われ始めたものではなく、柳田国男が、少なくとも明治期の『時代と農政』（一九一〇）あたりから昭和初期の『都市と農村』（一九二九）、『明治大正史世相篇』（一九三一）にいたるまで、一貫して問い続けていた問題意識のひとつであった。自ら消費し得ないものを過剰に生産し、自ら生産し得ないものを多く現金で購入し消費するという暮らしのかたちを農家に選択させていった都市の資本の力、不在地主に拘束され、一個の経営主体として独立し得ない農家という問題、農村の若者をとらえる「都会熱」、そして農村から都会へ流入した人々の貧困化など、柳田は、地方・農村の暮らしを包摂し次第に追い込んでいった〈仕組みとしての都市〉という問題を見据え続けていたといえよう。都市を中心とした仕組みに農村の日常が組み込まれていく時の暴力と矛盾を問題化しようとしていたという意味で、それは、都市と農村という単純な二項対立を超える視点であったともいえる。「都市」という問いは、決して奇を衒ったものではなく、むしろ戦後の民俗学のほうが忘却してしまった考え方であった。

共訳者の大月隆寛は、『消えるヒッチハイカー』の解説のなかで、「都市とは、そのような〈等身大の＝重信註〉身体の大きさを超えてゆかざるをえない仕掛けが、自身のあずかり知らない場所のそこここで無数にしかけられてゆく状態」であると指摘している［大月　一九八八　二九一］。つまり、等身大の私たちは、〈仕組みとしての都市〉に幾重にも媒介され、現在の日常を経験しているのである。

そして私は、「「世間話」再考」のなかで、都市伝説という考え方を「世間話」へと重ね合わせていくときに、この「都市」という問いを、「世間」という考え方に接合した。共同体／村の外側という意味だとされた「世間」を、近代化の過程で私たちの日常が一人ひとりの身の丈の大きさを超えて拡大していく、その内と外の変容のダイナミズムをとらえる概念として捉え直そうとした［重信　一九八九b］。先の大月の「都市」のとらえかたも、私が「世間」に重ね合わせた「都市」も、ともに基本的には〈仕組みとしての都市〉を対象化しようとしていた。

メディアそして身体

この〈仕組みとしての都市〉という考え方は、市場の仕組み

ばかりでなく私たちの身の丈の日常を外へと仲立ちしていく仕組み、広い意味でのメディアという問いを内包している。

ここでいうメディアとは、単にマスメディアやインターネットなどの情報通信システムだけを指すのではなく、マーシャル・マクルーハンが、この言葉を戦略的に使ったときのように、私たちの等身大の能力の「拡張」(extension)をもたらす機能に着目して「道具」と訳したほうがいいだろう[マクルーハン一九八七]。マクルーハンのメディア論は、筆記用具から自動車そして武器にいたるまで、あらゆるものを「拡張」をもたらすメディアとして位置づけているが、この道具としてのメディアという考え方は、〈仕組みとしての都市〉が具体的にどのように私たちの身の丈の大きさを超えていくかを可視化する。

そして、その道具すなわちメディアや、それを扱う技術に刻まれた時代性を語ることは、このメディアという考え方を通して、先の〈仕組みとしての都市〉の歴史性を射程におさめることになるはずであった。

たとえば、日本では主にタクシーを舞台に、乗せたはずの乗客が消えてしまう話と、ブルンヴァンが名付けた「消えるヒッチハイカー」とは、同じ話型の話といえる。そしてアメリカの話も日本の話も、自動車というメディアの内燃機関の力が、私たちの移動をめぐる身体能力を拡張し、それにより他者との関係性が変容していった歴史の過程に規定されている。

しかし同じメディアである自動車も、アメリカと日本における使われ方の歴史が、同じわけではない。「消えるヒッチハイカー」では、しばしば自動車による中長距離移動の途上で、ヒッチハイクする者を乗せ、運転者が占有する密室に、見知らぬ他者を招き入れることになる。一方で、日本の「消えた乗客」の場合は、大抵、都会の空車タクシーが客を乗せるところから始まる。利用者を求めて街頭を走り回るナガシという大都会特有のタクシーの営業形態により、自動車という密室が不特定の人びとに開かれた状況を前提にした設定だといえよう。

この「消えた乗客」は、昭和初期の東京でタクシー運転手を経験した者の記憶のなかでは、運転手達の溜り場になったガソリンスタンドで、新人を脅かすネタとして話題になったという[重信　一九九九　一六六]。

同じ型をもった話でありながら、自動車を西欧近代の文明として受け入れた日本では、そこに刻まれた自動車との関わり方が西欧とは、異なっていた。馬車による旅という下書きがあったアメリカでは、自動車を早い時期から中長距離の移動の道具として使い始めていたが、日本では明治三〇年代に移入されて以降、長きにわたって富裕層の贅沢の対象であり続け、生活のなかの道具となるのは、昭和初期のモダン都市におけるナガシ営業の均一1円タクシーの出現を待たねばならなかった。

この話の伝播過程の詳細は詳らかではないが、少なくとも一九二〇年代末から三〇年代のモダニズム期の大都会の円タクを舞台に「消える乗客」として定着していたという事実には、日本における自動車というメディアの受容と「モダン都市」との関わりの歴史が刻まれているといえるだろう。

また「都市」という問いのなかで、メディアによる私たちの日常の「拡張」を問題にすることにより、私たちの身体そのものを、〈仕組みとしての都市〉という問いのなかに組み込んでいく筋道があったことも付け加えておきたい。身体が、メディアを操り、そしてそのメディアが私たちの身体を拡張し変容させている。確かに、私たちの「身体」意識は、メディアにより媒介された経験のなかで、よりヴァーチャルなものになっていくという考え方が、今日ではとてもリアルになりつつある。

しかし四半世紀前、ブルンヴァンを翻訳した私たちは、もう少し愚直に、生身の身体にこだわろうとしていた。そうした身体を手放さないことにより、「身の丈」を超えていこうとする「都市」という仕組みを、批判的にとらえる足場をそこにすえようとしたと言ってもいいだろう。

方法としての世間話へ

この四半世紀、結局「都市伝説」という概念をことさらに使うことなく、口承文芸学と民俗学は過ぎてきた。

『消えるヒッチハイカー』の翻訳に関わった直後に書いた「「世間話」再考」(一九八九)のなかで、先にも述べたように、私は「都市」という問いを、「世間」という考え方に接合し、「世間」を私たちの日常が一人ひとりの身の丈の大きさを超えて拡大していく仕組みがもたらす、内と外の変容のダイナミズムをとらえるコンセプトとして捉え直そうとした[以下は、重信、一九八九b]。「世間話」とは、そうした〈仕組みとしての都市〉が日常を包摂していく過程を対象化する可能性を持つことになった。柳田国男の「世間話の研究」(一九三一)という論文は、地方の日常を変容させていった〈仕組みとしての都市〉の展開を柳田国男が解き明かそうとした『明治大正史世相篇』(一九三一)の作成過程で、彼が渉猟した新聞が、日常生活の変容を何も語っていなかったという事実をふまえ、そうした変容を対象化しうる「世間話」の可能性を説こうとしていた。それは、柳田が提示した、「世間話」という談話の技術のあるべき姿であったともいえる。私自身は、そうした「世間話」の捉え方を、「方法としての世間話」として位置づけた。そして民俗学の方法の根幹にある「聞き書き」を、「方法としての世間話」を話者との相互関係のなかで生み出していく現場としてとらえ直そうとした。

こうした考え方は、今に到るまであまり賛同を得られていない。そしてちょうど、『消えるヒッチハイカー』の翻訳が出た直後、翻訳者の一人である大月隆寛が企画に関わり『別冊宝島　九二　噂の本』(一九八九)が発行された。それは「都市に乱舞する異事奇聞・怪談を読み解く試み」というサブタイトルが与えられ、表紙のリードは「変な話、怖いうわさ、信じられない出来事……。都市の想像力の産物である〝語られた物語〟とそれを流通させる不可視の「語りのネットワーク」の検証を通して、都市のもう一つの貌に肉迫する!」とうたっていた。

収められた記事のタイトルを幾つか列挙してみよう。「オカ

ルト雑誌を恐怖に震わせた謎の投稿少女たち」「D．P．E．は逢魔の時間　複製技術時代の心霊写真」「あの「口裂け女」の棲み家を岐阜山中に見た！」「「飛び降りたアイドル」岡田友希子が、ブラウン管の向こうに出た仕組み」「アイドルスキャンダルの雛形「天地真理元トルコ嬢」伝説」そして「うわさの思想史」など十九件の記事が並び、「囁かれた怖い話、信じられない出来事」と題されたコラムが、四件（「ホテル篇」「墓地篇」「盛り場篇」「病院篇」）挿まれていた。

一つひとつの記事は、論文と言ってもいい硬い内容のものが多かった。そして、編集者がやや読者をあおるようなタイトルを付けたのである。こうしたタイトルの付け方は、今日から見ると、後にコンビニの本棚に並ぶような「噂」や「都市伝説」という言葉をまとったムック本などのさきがけになったのではないか、と考えられる。

『消えるヒッチハイカー』の翻訳の中心人物であり、この企画の仕掛け人でもあった大月隆寛は、そこに三本の論考を寄せていた。そのなかの一つ「語られた「異質なもの」について①「ヤツら」は街にたむろする：「割箸を鼻につっ込むチョンコー」というティーエイジャー伝説を読む」では、都内の高校生の間に流布した朝鮮高校の生徒に対する差別的な噂を取り上げている。喧嘩の武器に転用されると語られる割箸の日常性と、話の受け手の痛みの身体感覚にうったえるその暴力性、舞台となるラーメン店をめぐる現実感、「ツッパリ」をめぐる大衆文化的イメージの転用など、高校生の日常の風景を丁寧に掘り起こしながら、排除の暴力へと転移していく想像力の根に迫ろうとしていた。

そして私も、そこにタクシードライバーが語る噂を素材化するよう依頼され、原稿を寄せた［重信　一九八九ａ］。編集サイドからは、明らかに「消えた乗客」の話を取り上げることを期待されていたはずだった。しかし私は「今、タクシーは、シートを濡らし途中で消えてゆく、多少薄気味悪くともおとなしいあのよく知られた幽霊より、もっとしまつにおえない「お客さま」という「幻の乗客」を乗せて走って行かねばならない」と冒頭で述べて、一切、あの馴染み深い怪談には触れなかった。

タクシードライバーたちの話を聴いていくなかで、浮かびあがってきたのは、客とのやり取りのほんのささいな齟齬が原因となって起きるトラブル、場合によっては具体的な原因が運転者にはほとんどわからないままトラブルにいたるような、客とのアクシデントの話の数々だった。唐突に消えて幽霊であった正体をあらわにする「消えた乗客」と、普通の客として乗り込んで来ながら突然豹変する客をめぐる話の構造はよく似ていた。

しかし、豹変する客の理不尽にさらされながら、多くの場合、タクシードライバーには反論の機会が与えられず、現実的なペナルティにさらされる危険性があったことが、罪のない「消えた乗客」とは大きく異なっていた。

現在のタクシードライバーの仕事は、一九七〇年代以降、運輸交通業というより、ことさら接客業として位置づけられ、客からの苦情などを受けて、場合によっては運転者の処分にいたるような制度に拘束されている。トラブルに発展し客に苦情と

して訴えられた時には、多くの場合、客の理不尽な暴言などより、まず運転者の接客態度が問題にされる傾向がある。さらにそれが具体的な処分の対象になり、乗務できなくなる危険性もあった。彼らの仕事の現場は、そうした接客サービスの理屈が前提とする「お客さま」という幻影、ある意味での「幻の乗客」に縛られていたのである。[4]

それらは、あらゆる消費と利用の場面で、快適さと便利を求めて止まない私たちの欲望が、労働の現場と市場を規定している、今日的な〈仕組みとしての都市〉の軋みの現れであった。

ドライバー達は、大抵、自らが体験した理不尽な客をめぐる話を持っていた。シートを濡らして消える乗客の話など鼻先でせせら笑う彼らが熱心に語ったのは、そういう話だった。それらは、「方法としての世間話」により析出された話の数々であった。

私はそのエッセイに「サービスという神話」という題を付けた。しかし、「異事奇聞」でも「怪談」でもない、単なる体験談を扱ったように見えたエッセイは、編集者にとってインパクトが足りなかったのか、「タクシーの後部座席に坐るのはシートを濡らす幽霊か、それとも「幻の乗客」たちなのか?」というタイトルが付され、さらには、本文中に何枚もの扇情的なイラストが挿入された。その過剰な演出にやや辟易としながら、自分の論考自体がこの本のなかで浮いていることを感じ、居心地が悪かったことを覚えている。

おそらくそれは、初発に刻まれた「都市伝説」に与えられはじめた方向性と、「方法としての世間話」の懸隔だった。「方法としての世間話」にとって、対象となるのは、決して奇事異聞や怪談ばかりではない。むしろ聞き書きという方法を通して浮かび上がる、私たちの生活のありよう自体を問い質すてがかりとなる話の広がりなのである。[5]

おわりに　新たな民俗語彙としての「都市伝説」

そして今私は、あのコンビニに並ぶ「都市伝説」本や、テレビドラマの「都市伝説の女」をお前はどうするのだ、と詰問されても、私自身がそれらを分析する興味を失っている。

シンポジウムで山田厳子が提示した、「都市伝説」という言葉そのものが、現在どのように使いまわされているのか、語彙の民俗誌的な探求の可能性は、十分に魅力的な視点だと感じた。もちろん、「都市伝説」という言葉を冠したコンビニ本のなかの話を集めて整理して、分析することを否定するわけではない。そこに、たとえば現代における大衆文化としての奇事異聞・怪談研究としての展開を期待できるだろう。しかしこれまでしばしばあったような、既存の話型の蓄積に還元してしまうのではなく、同時代のコンテクストを考慮した分類や解釈を工夫する必要がある。さもないと、真正な民間伝承のあり方を措定し、その大衆文化的な流用を批判的に検討するような議論と同じになってしまう危険性もある。そうした陥穽を避けたとして、その奇事異聞・怪談研究は、何を語りうるのだろうか。「お話」の

市場を動かしている、私たちの想像力と欲望の姿なのだろうか。

いずれにせよ、はっきりしていることは、「都市伝説」は、口承文芸学や民俗学の研究にとっての積極的な分析概念ではもはやなく、敢えていえば、「お話」を指示する新たな民俗語彙の一つに成長した言葉なのではないだろうか。

註

（1）［飯島　一九九七］を参照。飯島は、欧米の「現代伝説」研究の動向と、一九八〇年代以降の日本の世間話研究の展開を切り結んで検討している。

（2）ブルンヴァンの都市伝説に関する著作は、以下のものがある。

Vanishing Hitchhiker : American Urban Legends and Their Meanings W.W. Norton 1981

The Choking Doberman and Other "New" Urban Legends W.W. Norton 1984

The Mexican Pet : More "New" Urban Legends and Some Old Favorites W.W. Norton 1986

Curses ! Broiled Again! : The Hottest Urban Legends Going W.W. Norton 1989

The Baby Train : And Other Lusty Urban Legends W.W. Norton 1993

The Big Book of Urban Legends : 200 True Stories, Too Good to Be True Paradox Press (DC Comics) 1994

The Truth Never Stands in the Way of a Good Story Univ. of Illinois Press 2000

Too Good to Be True :the Colossal Book of Urban Legend W.W. Norton 2000

Encyclopedia of Urban Legend W.W. Norton 2002

Be Afraid, Be Very Afraid : The Book of Scary Urban Legend W.W. Norton 2004

（3）［岩本　二〇〇六］は、ハンス・ナウマンの文化の二層性という考え方が日本に受容され、生み出された「基層文化」という考え方が、ナウマンのそれとは正反対の意味で構築された誤謬的受容の過程を明らかにしている。

（4）そうした「お客さま」へのあるべき身振りを規範化して描き出すのが「親切なタクシードライバー」を語る美談であり［重信　一九九〇］、それらは、暴力的で、理不尽な客を語るタクシードライバー達の世間話と、表裏の関係にある。

（5）敢えて民俗学ではなく口承文芸学を前提にして、「方法としての世間話」を、当時のアメリカの民俗学における問題領域に重ねるなら、urban legend よりpersonal narrative という問い［Stahl　1989］のほうが適切であったかもしれない。話者の語る経験談そのものを「話」として素材化していく手つきは、たとえば、ニューヨークで犯罪に遭遇した人びとの語りに着目し「ニューヨークの都市民俗」を標榜した［Wachs 1988］などを生み出した。ヴァッ

クスのこの仕事は、日本では民俗学や口承文芸学にあまり同情のない翻訳がなされたため、管見するところ民俗学・口承文芸学方面ではほとんど話題にならなかった。

文献

Brunvand, J. Harold 1971 “Modern Legends of Mormondom,or,Supernaturalism is Alive and Well in Salt Lake City” [Hand ed, 1971, 185–202])

Brunvand, J. Harold 1980 “Urban Legends : Folklore for Today” *Psychology Today* Vol 14-1 pp.50–66

Degh, Linda 1971 “The Belief Legend in Modern Society Form. Function and the Relationship to other Genres”([Hand ed, 1971, 55–68])

Dorson, Ricard M 1981 *America in Legend : Folklore from the Colonial Period to the Present* Pantheon Books

Dorson, Ricard M. 1971 *Land of the Millrats* Harvard Univ. Press

Hand, Wayland D ed. 1971 *American Folk Legend : A Symposium* (1971) Univ. of California Press

飯島吉晴 一九九七 「現代伝説研究の課題」(『口承文芸研究』第二十号 一四五－一六二)

岩本通弥 二〇〇六 「戦後民俗学の認識論的変質と基層文化論―柳田葬制論の解釈を事例にして」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三二集二五－九八)

マクルーハン，マーシャル(栗原裕・河本仲聖訳)一九八七 『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房 (↑原典一九六四)

大月隆寛 一九八八 「解説「都市」とフォークロア」(大月他訳『消えるヒッチハイカー』新宿書房 一九八八 pp.二七九－三〇二)

重信幸彦 一九八九a「サービスという神話：タクシーの後部座席に坐るのはシートを濡らす幽霊か、それとも〝幻の乗客〟たちなのか」(『別冊宝島九二 うわさの本』JICC出版局九〇－一〇五)

重信幸彦 一九八九b「「世間話」再考 方法としての「世間話へ」」(『日本民俗学』一八〇号 一－三五)

重信幸彦 一九九〇 「「心温まる話」の政治学：タクシードライバーと「サービス」という神話」(『口承文芸研究』第十三号 九五－一〇三)

重信幸彦 一九九九 『タクシー／モダン東京民俗誌』エディタースクール出版部

Stahl, Sandra Dolby 1989 *Literary Folkloristics and the Personal Narrative* Indiana Univ. Press

ターナー，F．ジャクソン (松本政治・嶋忠正訳) 一九七三 『アメリカ史における辺境』北星堂 (↑原典一九二〇)

Wachs, Eleanor 1988 *Crime-Victim Stories New York City's Urban Folklore* Indiana Univ. Press (邦訳 川端正道、伊藤寿夫訳『あり金出せ！ ニューヨーク犯罪被害者物語』大修館 一九九四)

(しげのぶ・ゆきひこ／国立歴史民俗博物館)